

## 27 日本最古の産婦人科専書

小曾戸 洋

わが国現存最古の産婦人科の専書は金沢文庫所蔵『産生類聚抄』とするのが今日斯界の定説であろう(石原明・服部敏良)。同書は鎌倉末期、十四世紀初の成立とみられるが、最近演者はこれをさらに遡ると考えられる産婦人科の専書を見出した。日本医学史上、貴重な史料と考えられるのでここに報告する。

前田育徳会専経閣文庫にはその目録に鎌倉末期写と鑑定される失名医書(十五函九号)がある。紙高28・6 cm、幅22・9 cm。袋綴、全二六丁。現状では奇異なことに、卦線のある葉と無卦の葉とが交互に綴じられ、乱丁甚だしく文脈が通じない。また書名があつたはずの首を欠き、内容から平安末〜鎌倉期の医薬書であることは知れるも

の、いかなる性質の書であるかはわからない。

よつて書誌形態学的検討を行ったところ、実は本書はもと粘葉装をのちに袋綴本に改装したものであることが判明した。すなわち、卷子本具注暦用に片面に卦線の引かれた料紙を転用し、一紙を二ツ折にし、両面に書写していき、書写後、各葉のどの外側に糊付し貼合わせて粘葉装となした。後世その前半有欠本を得た前田家では装演師に命じ、各葉を解いて一紙の表裏を二枚に剥ぎ分け、裏打して袋綴本に改装。よつて乱丁をやむなくしたのである。この過程に従い本書を旧状に復してみると、文脈は通じ、さらに粘葉装で前半九葉三六頁分を欠損していることが明らかとなった。何となれば、旧装の各葉のどのに丁番号(背丁)が記されているからで(現状では小口にきている)、現存部はその第十〜二十二丁(二葉、四八頁分)であることがわかる。末尾は余白紙が充分に残っているから欠損はないであろう。内容は次のようである。

〔朱蜜方〕新生児に真朱・赤蜜を与える方。

〔牛黄方〕牛黄を与える方。

〔初与乳方〕「如常」と略す。

〔断齐方〕断臍の法。

〔洗浴方〕五方。

〔良日〕「陰陽道沙汰也」として略す。

〔哺穀方〕記載なし。

〔胞衣料理法〕胞衣の処理法。

〔臧胞衣法〕胞衣貯蔵。「医心方」巻二十三より「産経」

文を引用。

〔吉日〕「陰陽道沙汰」として略す。

〔産後禁忌〕「千金方」「小品方」を引用。

〔産後禁食〕六種を挙げる。

〔治産後運悶方〕六方あり、「経心方」「千金方」「葛氏方」

「産経」「僧深方」「孟詵方」を引用。

〔治産後悪血不止方〕四方。

〔治産後腹痛方〕五方。

〔婦人任身心不可服薬名目〕妊娠時禁忌の薬物八二種を

列挙。「産経」からの引用という。

〔婦人任身禁食〕妊娠時の食養に関する注意三一条。「産

経」からの引用という。

〔妊娠間可服薬并禁薬等〕この項は三二頁余にわたり妊

娠時に服用可能な薬や食品、また要注意のそれについて

詳細な記述がある。はじめに七三種を挙げ「出証本草」

という。次に「仙沼子事」そして「真珠事」（証類本草・

千金方を引用）があり、さらに〔果部〕一五種、米穀部一

四種、菜部二六種、獸部三二種、魚類二二種について記

載。和名を示すものあり、説明は至つて子細。日本旧伝

資料に拠る記述、『証類本草』に由来する記述を交える。

〔妾女為男法〕「欲生女者」を含め一五条。

以上の記載をみるに、本書は宮廷の皇族・貴族を対象

とした産婦人科の専書であることは明白である。成立年

代については、旧渡来の古卷子本医薬書を引用すること

〔「医心方」からの援引でなく直接引用も少くない。〕と

同時に「証類本草」を引用すること〔「大観」の成立は一

一〇八。その日本渡来初出記録は『通憲入道目録』（一一

五九以前）。その他内容から推して、本書の成立は「産生

類聚抄」より早く、宮廷医家（丹波氏か）の手によつてお

そらくは十三世紀中に編まれたものと考えることが可能

であろう。

本書の書写人について他の尊経閣文庫の古典籍と比較した結果、古卷子本『吉日抄』と筆跡を同じくすることを認め得た。同書末には異筆で「以先父自筆之証本書写与愚息長周訖、是宋人呉祐之筆也、司儀令丹波〔花押〕」なる奥書がある。また同文庫の古卷子本『座右抄』の料紙には本書と同様の具注曆用卦紙が用いてある。これらのことも含め、今後さらに本書について書誌・内容の両面から研究を進めていく必要があると考えている。

(北里研究所附属東洋医学総合研究所・医史学研究部)

## 28 小島原泰民とその訳(著)書

○谷津三雄、渋谷 鋳

小島原泰民には『歯科病理各論』上・下巻(明治二十三年刊)、『歯科小枝』(同年刊)、『歯科解剖学』(同二十四年刊)、『歯科生理学』(同二六年刊)、『実地必携内科攬要』(同二六年刊)、『裁判歯科学』(同二七年刊)、『歯科冶金学』(同二九年刊)、『歯科必読外科通論、全』(同年刊)、『歯科病理各論、完』(同三〇年刊)、『歯科生理学』再版(同三二年刊)、『畸形歯論』(同三三年刊)、『齶歯矯正術』(同三三年刊)、『歯科解剖図譜』(同三五年刊)など多数の著(訳)書があり、これらの著書がわが国の黎明期における歯科界に及ぼした影響は、計り知れないものがある。

小島原泰民は安政五年(一八五八)二月二四日、福島県会津高田町大字藤家館字藤田の農家の五男として生れる。